

大正期の野球におけるプロフェッショナル・イデオロギーの  
萌芽に関する研究

菊 幸 一<sup>1)</sup> 古園井 昌 喜<sup>2)</sup>

**A study on the awakening of the professional ideology in  
Japanese baseball in the Taisho era**

Koichi Kiku<sup>1</sup> and Masaki Kozono<sup>2</sup>

**Abstract**

The purpose of this study is to clarify the characteristic types of professional ideology which began to arise among the various parties concerned with baseball in the Taisho period, by using a historico-sociological perspective. The objects of this study are three teams, i.e., the Japan Athletic Association (in Japanese, Nippon Undo Kyokai), the Tenkatsu baseball team (Tenkatsu Yakyu Dan) and the Daimai baseball team (Daimai Yakyu Dan) because it would be conceivable that these three teams can be organized in a manner based on the characteristic type of professional ideology. The perspectives and frameworks for analysis are made up concretely by ideologically interrelated types between the baseball system and the economic system from the viewpoint of that system. That is, as two model types regarding the formation of ideology, it was thought that there was one type of autonomous formation (Type A) which takes precedence over the profit within the baseball system, and the other (Type B) of a heteronomous formation which favours the profit within the economic system in disregard of that of the baseball system.

As a result of analyzing the above three teams, the arising of a professional ideology can be classified as follows:

1) The Japan Athletic Association was a party which looked forward to internal reform by natural growth, and promoted professionalism in order to realize a particular ideal, that is to develop sound baseball within their system without allowing the involvement of an economic order, i.e., enterprise. (Type A)

2) The Tenkatsu baseball team was an "enterprise-led" type of party, which looked forward to an external reform of the system with the desire to promote professionalism by allowing the involvement of the economic order and being utilized by such an order. (Type B)

3) The Daimai baseball team possessed the same ideology as type B, but it was an "enterprise-leading" type of the baseball system, a new conservative party which tried to maintain an amateur qualification. (Type C)

These three types of professional ideology at the dawn of the baseball period are not only paid attention to from the viewpoint of the effect on the establishment of the later professional baseball system, but also need to be examined further in order to resolve the fundamental problems regarding the professionalization of the present world of sport considered in its entirety.

**Key words: baseball, professional ideology, Taisho era**

(Japan J. Phys. Educ., 37: 1-14, June, 1992.)

1) 奈良女子大学文学部  
〒630 奈良市北魚屋西町

1. Faculty of Letters, Nara Women's University, Kitauoya-nishimachi, Nara  
(630)

2) 下関市立大学経済学部  
〒751 下関市大学町 2-1-1

2. The Faculty of Economics, Shimonoseki City University, Daigakucho  
2-1-1, Shimonoseki (751)

キーワード：野球，プロフェッショナル・イデオロギー，  
大正時代

## 1. はじめに

近代から現代社会に至るスポーツの歴史の中で、今日ほどスポーツと経済との「制度的な」結び付きが強く意識され、所謂アマチュア・スポーツのプロ化が1つの社会現象として認知され、容認されている時代はなからう。かつて、近代オリンピックにおけるアマチュア・スポーツ精神の守護神とまでいわれた Brundage<sup>3)</sup>の「プロ・スポーツはスポーツではなくビジネスだ。アマチュア・スポーツのアマチュアは余計な形容詞」という言葉からは隔世の感があり、時代はすでにスポーツ・イベントに企業名をつけた冠大会が何の抵抗もなく開催され、各種イベントの賞金や参加選手に対する参加料等の報酬は言うに及ばず、日本体育協会までもが新たな『日本体育協会スポーツ憲章』を施行し、事実上アマチュア競技会に対するプロ参加への道を開く事態となっている<sup>31)</sup>。部分的ではあるが、ソウル・オリンピックにおける同様な現象は未だ記憶に新しいところである。

ところで、これまで近代スポーツの生成・発展過程を考える上において、それを推進し、発展させていく関係者の考え方としてアマチュアリズムを前提とする考え方が主流を占めており、その制度的発展過程においてプロ・スポーツを連続的に布置しようとする考え方はあまり見られない<sup>31)</sup>。例えば、わが国におけるプロ野球の成立という歴史社会的現象に対しては、その当時に直接関わったある偉大な人物か、あるいは当時はそれと認められなくとも死後に一種のカリスマ性を付与された名前のはっきりした個人の思いつきや行為から説明しようとする試みが多く見られる<sup>32)</sup>。しかし、アマ・プロの区別なく、社会的制度の発展形態としてスポーツのそれをみた場合、当然そこには制度としてのスポーツ内部の関係者による様々な考え方の反映を看取できるはずであり、その考え方の内実には当該スポーツ種目にかかわる金銭報酬を伴

う専門家集団の結成とその組織化、すなわちスポーツのプロフェッショナル化(=プロ化)を推進しようとする考え方が何らかの形式と内容を伴って出現していたとしてもおかしくはないであろう。

先のプロ野球の例で言えば、近年、プロ野球の成立が読売新聞社および読売巨人軍を中心とする従来の成立史とは異なる角度から取り上げられており、とりわけその成立前史としての大正期におけるプロ野球チーム、日本運動協会チームの動向とその周辺を取り扱った書籍<sup>1,33)</sup>ないし論文<sup>9)</sup>が若干ではあるが散見されるようになってきた。またそこでは、同じくプロ野球チームでありながら対照的な存在としての天勝野球団、あるいはセミ・プロチームとしての大毎野球団が取り扱われている。しかし、いずれの文献も日本運動協会チーム、天勝野球団が本格的なプロ野球制度成立(昭和11年2月5日の日本職業野球連盟の成立)以前に結成されていた事実は認めながらも、前述した問題意識からそれらのチーム結成に働いた野球関係者を始めとする内外のプロ化を推進しようとする考え方は明らかにされておらず、またそれが後の本格的なプロ野球制度成立にどのような意義を持ち、発展していったのかについては究明していない。さらに、大正という時代に同時に発生したこれら3チーム結成の背後にあるスポーツ・イデオロギーの比較分析やそこから見いだされる今日のスポーツ状況に対する興味深い原初形態としての考察はなされないままになっている。確かにこれまでの論稿<sup>15)</sup>では、明治期から醸成された武士道的イデオロギーの延長線上に大正期におけるこの3チームのスポーツ・イデオロギーを位置づけ、プロ野球制度成立に向けた制度内的一心理的利害状況<sup>33)</sup>の歴史的類型としてその一部を明らかにした。しかし、そこで扱われた3チームのイデオロギーの内実は資料的に詳細な検討がなされておらず、また社会学的な制度的視点からプロフェッショナル・イデオロギーとして本格的な類型化を試み、さらにそれらを比較検討したものではなかった。

ここで用いたスポーツにかかわる「プロフェッショナル・イデオロギー」とは、前述したスポーツのプロ化を推進するイデオロギーのことであるが、詳細には次のように考えることができる。すなわち、それは何らかの社会的利害を反映してプロ・スポーツ集団を社会的制度として位置付けようとするまとまった意識形態であり、基本的には、1) 成員の生計維持に必要な最小限の報酬 (fees), 2) 資格の設定, 3) 倫理綱領の確立, 4) 地位向上運動を目指す職能集団の形成, 5) 特別な技術と訓練<sup>30)</sup>, をめざそうとする意識によって特徴づけられる。そして、制度的にその意識形態は、1)にかかわる社会的制度としての経済制度のスポーツ制度への介入、利用過程と、2)から5)にかかわる文化制度としてのスポーツ制度の自律的な展開過程との相互関係によって規定されると考えられる。特にここでは、前者の1)に中心にかかわり合いながら経済制度の制度的秩序がスポーツ制度の制度的局面 (sphere) をその手段として巧みに利用しようとする意識形態を「経済的イデオロギー」と定義しておく<sup>18)</sup>。また、1)への意識形態を制度的自立のための必要条件あるいは手段として含みつつ、主に後者の2)から5)にかかわって制度内部の関係者がある身分的な利害状況に規定されながらその確立をめざそうとする意識形態を「プロフェッショナル・イデオロギー」として定義しておく。

ところで、一般に企業における文化事業には、1) 人々の文化欲求の高まりに対して企業が文化を商品として、生産、販売、サービスを通して利益を目的として行動する事業と、2) 利益を目的とせず、企業の社会的貢献として企業利益の一部を社会に還元していく事業とがあるといわれる<sup>39)</sup>。確かに今日においては、企業が幅広い文化・芸術活動に対して積極的に支援する運動、いわゆる「企業メセナ」運動が注目され、上記2)の意味において、経済制度の組織である企業と文化制度との新たな展開過程が注目されるようになってきた<sup>47)</sup>。しかし、この上記2)の意味での企業と文化制度との関係は、あくまで

近代および現代社会における制度の相互連関過程における歴史的な所産としてみていくべきであり、ここでの議論の焦点はもっぱら1)の観点から経済制度としての企業と文化制度としてのスポーツとの関係をとらえながら、経済制度のもつ制度的秩序に左右されず、利用されず、さらには下位制度化されないプロ・スポーツ制度成立のための自立的、かつ自律的な「プロフェッショナル・イデオロギー」の萌芽の内実を問うことにある。

そこで本研究では、プロ・スポーツの成立を前提として、とりわけ大正期の野球において関係者に芽生え始め、具体的なチーム結成につながった日本運動協会チーム、天勝野球団、大海野球団各チームの結成動機をスポーツ・イデオロギーの側面からとらえ直し、それを上記のような「プロフェッショナル・イデオロギー」の萌芽としてとらえると同時に、その内実を歴史社会学的に分析し、今日のスポーツ状況との関係を明らかにすることを目的とする。そこで特に焦点化される分析の枠組みは、上記3チームを対象とした野球制度と経済制度との相互関係の形態からみたプロフェッショナル・イデオロギーの類型化である。また、本研究に基づく発展的な見解として、それらが果たした昭和初期のプロ野球成立に対する役割とその今日的意義への示唆が考察されることになろう。

## 2. プロフェッショナル・イデオロギー生成への制度的視点 —分析の枠組み—

スポーツやプロ・スポーツをどのような共通の概念構成によって分析の対象としてとらえ、それに基づいてその構成要素をどのような手続きによって仮説的に設定していくのかについては、本研究における歴史現象の社会学的分析にとってまず明らかにしておかねばならない不可欠の課題である。また、イデオロギー概念やスポーツ・イデオロギーについてもその概念は極めて多義に渡っており<sup>44)</sup>、分析のための有効な名目的定義<sup>45)</sup>がその前提として措定されなけ

ればならないであろう。

この課題について、これまでガス・ミルズの制度概念に基づく次のようなスポーツおよびプロ・スポーツにおける共通の概念構成を示してきた<sup>13,16,17,24)</sup>。その共通の概念を構成する要素は、スポーツ・シンボルの局面(スポーツ・イデオロギー, スポーツ・ルール, スポーツ・シンボル), スポーツ・テクノロジーの局面(スポーツ行動様式, スポーツ文物), スポーツ地位の局面(スポーツ組織等)とに分類されるが、ここで必要なのは、とりわけスポーツ・シンボルの局面の構成要素であるスポーツ・イデオロギーの概念を名目的に明らかにし、定義することである<sup>26)</sup>。詳細な議論については紙幅の関係上、割愛せざるを得ないが、本研究ではスポーツ・イデオロギーを「スポーツの存在を正当化し、人間や社会に対するその意義を明示するスポーツ価値観を中心とした社会的な利害を反映するある程度まとまった意識形態」(菊<sup>15)</sup>p. 94—95)として一応とらえておく。すなわち、スポーツ・イデオロギーとは、ある程度理念的に整序されているところの概念の社会的存在形態およびその体系であり、より簡単にいえば社会的利害を反映した制度を支える人々の考え方、それに対する意味、価値の付与の総体としてとらえられるであろう。また、分析のための段階的把握として、ここでは特定個人の持つ「考え方」のイデオロギー的性格を「信念」とし、特定集団のそれを「信条」とし、それらがスポーツ界全体に明示され得る段階まで達したものを「イデオロギー」として一応区別しておくことにする。しかし、本研究が対象とする「イデオロギー」はその萌芽の段階であるために、言説の内容が「信念」や「信条」のレベルに止まらざるを得ない限界をもつことが予想される。その場合、それら「信念」や「信条」をある社会的・制度的利害に拘束された言説ととらえることによってイデオロギー生成の萌芽として論じていくことにしたい。

次に、先のガス・ミルズ<sup>8)</sup>や Feibleman<sup>6)</sup>、さらにはサムナー<sup>41)</sup>や佐伯ら<sup>36)</sup>の見解をもと

に、制度化の概念からプロフェッショナル・イデオロギーの生成は大きく2つに類型化することが可能である。すなわち、制度化の概念から制度の成立形態を「自然成長的制度」と「制定的制度」の2つに類型化すると(佐伯<sup>36)</sup>p. 35)、野球の成長、発展をめぐる経済制度とのイデオロギー的關係は、あくまで従来の野球イデオロギーの自然成長的發展形態として野球制度内部におけるプロフェッショナル・イデオロギーをとらえていく立場と、経済制度内のイデオロギーの介入、利用を許容した制定的形態としてそれを見ていく立場の2つに大きく分けられるということである。本研究では仮説的に、両者のヘゲモニー關係において、前者を野球制度内部の利益を優先した自律的なイデオロギー生成のあり方(仮にAタイプのイデオロギー生成)と考え、後者を制度外的利益(ここでは経済制度内部のイデオロギー)を優先した他律的なイデオロギー生成のあり方(仮にBタイプのイデオロギー生成)と考えておく。具体的な前者の野球制度内部の利益とは、野球制度の維持・存続・発展に関わってあくまで制度内部の利害状況や理念的側面、例えば伝統的な武士道精神や精神修養的側面の尊重、野球に関わる様々なルールやマナーの遵守、選手のプレーを常に最高度に発揮できる環境の整備などを、野球関係者の主体性や自立性および自律性のもとに文化としての野球のアイデンティティとして確立することを意味する。これに対し、後者の制度外的利益とは、経済制度内部のイデオロギーに代表される経済的利益、例えば経済収益やイメージアップにつながる宣伝効果にみられるメディア機能などを優先させ、その主要な目的をあくまで経済制度の主に組織的側面における維持・存続・発展におくことを意味する。

以上のような見解をもとに、制度的視点から野球におけるプロフェッショナル・イデオロギー生成の内実を類型化すると図1のような分析の枠組みが得られる。以下、大正期の3チームにみられるプロフェッショナル・イデオロギーの萌芽は、この枠組みに沿ってその内容が

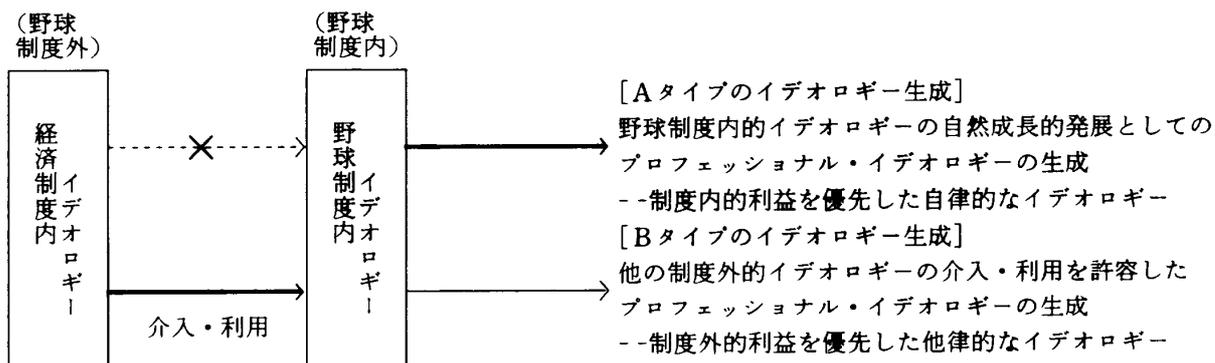


図1. 野球におけるプロフェッショナル・イデオロギー生成のタイプ分析の枠組み<sup>注7)</sup>

記述，説明，評価されることになる。

### 3. 大正期の野球におけるプロフェッショナル・イデオロギー萌芽の3類型

#### 1) 日本運動協会チームの場合

1905（明治38）年に行われた第1回早稲田大学米国遠征メンバーであり，当時の野球部長であった安部磯雄の指導，影響を受けた河野安通志，橋戸 信（通称，頑鉄），押川 清らは，他大学関係者らをも発起人としながら<sup>30)</sup>1921（大正10）年合資会社日本運動協会を結成した。雑誌『運動界』に掲載された「日本運動協会創立の趣意」によれば，彼らがこの運動協会を設立しようとした動機は，運動競技を学生の専有物にするのではなくあらゆる階級や年齢を越えた人々に広く普及させようとしたこと，したがってその目的は，まず東京市民が要求する理想的競技場を提供し，ここに運動界の理想の姿を示して運動競技界の健全なる進歩，発展を図ることに求められた<sup>32)</sup>。「定款」に定められた事業目的としては，「一，運動競技に関する一切の事業，二，運動場競技場の設計工事，工事監督修繕請負及び之れに附帯する一切の業務，三，各種運動体育用具の製造販賣及び之れに附帯する一切の業務」（日本運動協会発起人一同<sup>32)</sup>p. 127）が挙げられていたが，実際に手掛けることができたのは日本運動協会専属チーム（通称，芝浦協会チーム）というプロ球団の創設，経営と，日本運動倶楽部という現在でいうところのテニスクラブ兼アスレチッククラブの経営だけであっ

た。

ところで，その「起業豫算」の内訳（日本運動協会発起人一同<sup>32)</sup>p. 121—122）では，総額予算90,000円のうち75,455円30銭が芝浦に6千余坪（約2万平方メートル）のグラウンドを造るための借地権の費用に充てられており，それに関連して外塀と6カ所の門に1,500円，スタンドと固定ネットの費用が3,500円見積もられていた。これらの予算内訳から考えると，河野，橋戸，押川ら協会関係者は，当時の米国大リーグの経営状況を参考にしながら本拠地球場造りから着手したということが理解できよう。球場を持つことによって経済的，物質的に他の経済的制度から自立した野球制度内の基盤を確立しようとする点で，「河野たちがこの時，いかに明確な理念をもってプロ球団経営に乗り出したかが分かる」（佐藤<sup>30)</sup>p. 17）のである。また，図2に示す1921（大正10）年に計画された1922（大正11）年度における協会チーム完成後予算の内訳（日本運動協会発起人一同<sup>32)</sup>p. 125—126）を見ても，彼らが初のプロ野球チームの経営にあたって詳細に収入と支出の予算を検討し，利益金の処分法まで正確な数字をもって示していたことが理解される。さらに，この財政的基盤は日本運動倶楽部規則第5項「本倶楽部員たらんとするものは入会金として金貳拾圓を，會費として一年分金拾貳圓を日本運動協会に納むるものとす」（日本運動協会発起人一同<sup>32)</sup>p. 136）とあるように，すべて会員の入会金と会費をもとにした資本によって形成され運用

		本協會專屬チーム(十五人)完成後豫算(初正十一年度)	
		収入之部	
		一金二十二萬八千六百圓也	
		内 譯	
		(1) 在阪神俱樂部チームとの對抗試合十五回(一回三千圓) (2) 在京濱俱樂部チームとの對抗試合二十回(一回二千圓) (3) 在東京大學チームとの對抗試合十回(一回三千圓) (4) 外人招聘試合(在米國太平洋沿岸、ハワイ、マニラ等) (5) 在 外 邦 人 チーム 招 聘 試 合	
		雜 収 入(第三者の試合或は其他の競技に運動場を貸與せる等の収入) 俱樂部會員三百人分一ヶ年間會費(一入一ヶ月金一圓)	
		支 出 之 部	
		一金十九萬一千九十八圓四十錢也	
		内 譯	
		(1) 乃至(3)の収入を五分し其二を相手方に與ふる計算とす 富 協 會 選 手 旅 費 (4)の 招 聘 費 用(十年 度 豫 算 の 通 り) (5)の 招 聘 費 用(同 上) 運 動 場 及 ス タ ン ド 保 繕 費 一 ヶ 年 分 借 地 料 諸 報 酬、給 料 及 選 手 用 具 類 購 入 費 共 諸 稅、交 渉 費、旅 費、廣 告 費 及 雜 費	
		差引金三萬七千五百一圓六十錢也	
		純 益 金	
		利益金處分法	
積 立 金	百分の十以内		
役員賞與金	百分の十以内		
選手隱退料積立金	百分の十五		

図2. 日本運動協會專屬チーム完成後豫算  
(日本運動協會発起人一同<sup>32)</sup> p. 125-126)

されたのである。以上のような予算関連事項は、この当時の一部の野球関係者がすでに確立された自立的なクラブ経営的発想とそれを具体化する力量を持っており、日本の野球の発展のため、あるいは米国大リーグを模範としてその域に達するため、用意周到に他の経済制度に左右されない自律的なプロフェッショナル・イデオロギーを実現しようとしていた一証左と考えられよう。

次に、日本運動協會チームの結成それ自体の目的としては、橋戸 信が「職業野球團設立の主旨」と題しプロ・チーム設立の事情について、「本協會專屬のチームは、實に本邦最初のプロ

フェッショナル・チームである。人格に於いて、技術に於いて、大學チーム以上の強チームとなり、本邦球界の指南軍たるを期するのである」(橋戸<sup>11)</sup>p. 63)と述べているように、職業野球団がこれからの野球界のリーダーシップをとり、その技量はもちろんのこと人格においても大学野球チームを上回って外国チームと互角に対抗し、以て国民各層の支持を得、野球界全体の発達に寄与することを明らかにしている。そして、このような「プロフェッション」に対する純粋な技量・人格の優越性への認識と先の西欧合理的なクラブ経営的発想の醸成とは、互いに相矛盾することなく野球制度内部で自律的に展開、

強化されていたのである。

例えば、選手の募集については、「世間に名乗って出て恥かしくない、學歷もあり、人格に於ても申分なく、そして、優秀な技倆を具備した選手」(河野<sup>22</sup>p. 48)を採用しようとしたし、その待遇条件としてこの時すでに賞与はもちろんのこと、公傷に対する保証から現在のプロ野球の年金制度に当たる恩給制度まで考えていた。また、技術のほかに人格や学力を相当重視し、その力量を伸ばすために学校へまでも行くことを許可している<sup>10)</sup>。協会チーム監督河野安通志は、「物質上の問題は極めて些細なることで…所謂興行的にプロフェッショナル根性になり勝ちの浮薄を警めて、我國の職業野球團は、斯くの如き立派なるものであると、寧ろ吾に習ひ、他を改めさする程の權威があるものをば、球界に名乗らしめないならば、凡ては徒勞に歸して、且つ、一般球界のファンが期待にも叛かねばならない羽目となるのである」(河野<sup>23</sup>p. 16)と述べ、技術的にはもちろん、人格的にも球界の模範となるようなチームを作らなければプロ球団の前途はないと主張した。この信条は、日本運動倶楽部ハウスにおいて行われた見習い研修時の合宿生活においてより一層明確に現実化され、午後1時から4時までの野球の実技練習を除けば、「野球理論」「野球英語」のほか、「簿記」「一般英語」「数学」等の勉強の時間にその大半が割り当てられているばかりでなく、「腕は第一に必要であるが、素行が修まらねば、選手としての眞の価値は認められ得ない」(河野<sup>23</sup>p. 16)として合宿生活における規律を最大限重視し、まさに「ストイックな合宿生活」(佐藤<sup>38</sup>p. 37)を選手に送らせていたのである。

このように日本運動協会チーム結成をめぐる河野、橋戸、押川ら野球関係者のプロフェッショナル・イデオロギーの萌芽は、他の経済的秩序に支配されない自律的なプロ野球チームを作ることによって彼らの理想とする運動競技の姿と野球の発展を推進し、それを具体化させようとしたものであったが、歴史的には1923(大正12)年の関東大震災による被災から立ち直ることが

できず、翌1924(大正13)年京阪神急行電鉄株式会社社長小林一三の好意によって宝塚協会として再出発した。しかし、ここで注目されるのは、この宝塚協会チームへの移行の際にも監督河野安通志は阪急電鉄の意向によるチームづくりを拒否し、協会の理想とするプロ野球チーム実現について阪急電鉄が認めることを絶対条件とした<sup>51)</sup>という点であろう。その後、1929(昭和4)年7月に満州遠征を最後としてチームは解散したが、宝塚協会を含めた約9年間余の通算成績は、322勝131敗14分であった<sup>10)</sup>。

## 2) 天勝野球団の場合

これまで述べてきた日本運動協会チームの結成とはほぼ同時期に、同じくプロ・チームとして天勝野球団が結成された。天勝野球部員、鶴芳生は野球団発足の事情について「松旭齋天勝は大に感ずる所有りて昨年二月(筆者注；大正10年2月)チームを作り舊慶應選手小野氏のコーチの下に熱心なる練習を開始致しました。當時横濱にて興行中殊に晝夜二回の興行にも係わらず、選手は毎朝八時より公園グラウンドにて熱心に小野氏よりコーチを受けた甲斐あって技倆はメキメキ上達して各選手の鼻息の荒いのには大に驚きました」(鶴<sup>12</sup>p. 115)と述べている。「舊慶應選手小野氏」とは慶応大学の往年の名投手小野三千磨のことであり、その後大毎野球団のエースとして活躍し、毎日新聞運動部記者を経て都市対抗野球の育ての親と言われた人物である。そのメンバーは、「前慶應の永岡君、前法政の浅井君、オール吳の脇坂君」(鈴木<sup>43</sup>p. 22)「明大先輩からは中澤君を入れ、…法政現役田中君を呼び、更に慶大先輩からは鈴木君を招いて、之に現役の濱野君を抜き来り、巨漢青山を相撲チームから抜擢して陣容の整備はオサオサ大毎に次ぐ粒揃ひ」(運動界編集部<sup>50</sup>p. 84)であった。その当時の六大学における有力選手を多数集め、有名コーチをつけた天勝野球団は、日本ばかりでなく満州・朝鮮においても天勝一座の興行とともに試合を行っていた<sup>12)</sup>。

すなわち、このチームは奇術松旭齋天勝一座付のそれであり、各大学出身者の有名選手を集

め、各地の興行先でその宣伝と人気を高めるために試合を行っていたのである。前述した「松旭齋天勝は大いに感ずる所有りて」という、このプロ・チーム結成の動機について、二代目天勝の夫、中井 繁は、「野球部を作ったのは初代天勝の夫、野呂辰之助で、興行先で地元のチームと試会をして大いに宣伝しようというねらいでした」(中井<sup>29)</sup>)と明確に天勝野球団結成の目的を語っている。この信念の背景には、天勝一座という経済制度の内に組み込まれた組織が、野球制度の有するシンボリック的要素をその経済目的のために手段化し、利用しようとした典型的な野球制度外的な経済的イデオロギーの存在が看取されるであろう。もっとも、明確なプロ・チームではないが、このような宣伝のための野球チームはこの時期盛んに結成されていたようであり<sup>12)</sup>、天勝一座の野呂辰之助もその辺を考慮して思いきった有名選手によるお抱え野球チームを作ろうとしたということであろう。

しかし、このような経済的イデオロギーに対し、実際にプレーをしていた選手、コーチ等の意識や信念はどうであったのか。前述した鶴芳生は、「尚チームは他の同業者間に於けるチームと異なり、廣告本位のチームでは有りません。…商買と野球の試合は別問題です。」(鶴<sup>12)</sup>p. 117)と言い、1923(大正12)年当時の主将であり、コーチも務めた鈴木関太郎も「プロフェッショナルチームではありますが、精神に於いては、學生チームと少しも変わりはありません。野球道の精神を尊重して、飽く迄球界の健全なる發達に貢献したいと考へます」(鈴木<sup>43)</sup>p. 23)と述べ、野球道の精神を尊重することについては、日本運動協会チームと同様な野球イデオロギーを主張していた。ところが、前出の中井が世間のプロ野球に対する蔑視を承知の上で多数の大学選手が集まってきた理由について、第1次世界大戦後の不景気による就職難のさなか高給で大学出身の有名選手を駆り集めた野呂辰之助の意図に触れたように<sup>29)</sup>、結局のところ金銭的理由が第1の動機としてあげられると考えられる。事実、同年8月30日芝浦球場で行われた

日本国内初のプロ・チーム同士の試合(対日本運動協会チーム戦、結果は1-5で負け)において、彼らは「天勝軍は…素質もあり面も揃っては居るが粘りがなく、底力がない。それは言う迄もなく練習なきチームの悲哀である。如何な天才でも、名手も練習に遠かっては思ふようなプレーはできない。…過去の情力を集めただけのものならば、其チームの存在には何の期待をも有たれなくなるであらう」(運動界編集部<sup>50)</sup>p. 85)と酷評されていたのであった。

このように、天勝野球団に関係する個々人のプロフェッショナルに対する信念はそれとして、結局彼らは受動的に天勝一座の経済的イデオロギーを受容していたにすぎず、そこには野球制度内部からの自然成長的なイデオロギー改革として実際のプロ・チーム作りをしようとする具体的行動は認められない。したがって、天勝野球団は、日本運動協会チームにおける野球制度内部のイデオロギーと異なり、野球シンボルの利用を企図する企業の経済的イデオロギーの目的に対して完全に手段化されたプロ・チームといえるであろう。

### 3) 大毎野球団の場合<sup>49)</sup>

大毎野球団は、1920(大正9)年9月に大阪毎日新聞社の専属チームとして公認された、当時の実業団チームの中で最強と称せられた野球チームであった。そのメンバー構成をみるとチーム結成時から1929(昭和4)年3月の解散時まで毎年といってよいほど、有力選手の入退社が繰り返されており、その出身校は早慶を中心に東京五大学ばかりでなく、関西方面の有力校も少なくなかった。実業団最強のチームと称せられるようになるためには、「社員が筆を執る餘暇に、その得意とする野球技を以て、眞の、フェアプレーを宣傳する」(深江<sup>7)</sup>)程度の意識や考え方ではとうてい不可能であり、事実、新聞記者としての資質よりも何よりも、まず野球技術の優秀な者を次々と入社させていたのである。したがって、このチームはまず第1に技量優秀な選手を集めることによって最強チームとなり、それと同時にその野球シンボルが人々に

対するインパクト、影響力を有することを期待されていたチームと考えられよう。しかも、このチームの性格は、ただ単に「運動の奨励」「運動を宣傳する」(木造<sup>19</sup>p. 63)ことを目的としたのではなく、大阪毎日新聞社が1925(大正14)年の米国遠征に際し「大毎の海外宣伝に大きな効果を残した」(毎日新聞社史編纂委員会<sup>27</sup>)と述べているように、「新聞宣伝のためのチーム」(毎日新聞社史編纂委員会<sup>27</sup>)であったのである。この点で、大毎野球団は先の天勝野球団と同一の経済的イデオロギーに支えられたチームといえるであろう。

しかし、天勝野球団と異なり、選手には社内で一定の仕事が与えられていることになっていた。米国遠征の際に監督として同行した大阪毎日新聞社総務の奥村信太郎は、大毎チームの選手はいずれも若い新聞記者の群だから、一面新聞記者としての見学と修養とを擅にしたいというところから進んで計画は遂行されたと言い、大毎チームの米国遠征を以て単なる野球修行というよりも、むしろ若い記者団の修学旅行という方に重きを置きたいとの趣旨を表明している<sup>9</sup>。また、代表的な監督であった木造龍蔵は、1923(大正12)年の極東選手権大会野球競技の代表をめぐって「プロの大毎に参加資格があるのか」という大議論に際し、まず第1に団員は一部の囑託員を除いて普段は職務を行っていること、第2に野球の手当では特別に一切受けていないこと、第3に入場料徴収は学校チームでも行っていること等を挙げて「大阪毎日野球團を以って職業チームなりとする理由は寸毫も存在して居らない」(木造<sup>19</sup>p. 64)と断言した。とくに第1の理由については、各選手の業務内容まで明らかにしてこれを証明しようとした<sup>10</sup>。さらに、彼はその後においても「社では國民體質改良の見地から運動を宣傳するといふことに非常に熱心です。だから地方等に野球を宣傳するといふ野球團に対しては暇を與へて呉れますし、他の社員諸君もよくこの趣旨を諒解して多忙を忍んで我々を出して呉れるのです。」(木造<sup>20</sup>)と述べている。

ところが、当時大毎野球団の外野手で木造が公表した業務内容が「西部毎日原稿整理」となっている菅井栄治は、「私は、一応西部毎日原稿整理という職にありましたが、社会部や運動部の記者もやりました。が、それはあくまで建前で、本当の仕事は野球でした。あちこちの毎日新聞の販売店に頼まれて遠征し、地元のチームと試合をすると毎日新聞の部数が増える」<sup>40</sup>と証言している。つまり、経営者や幹部がどのような理想を掲げ、理由づけをしてみても、その実態はやはり大阪毎日新聞社が毎日新聞の販売部数を増やすために、野球制度内のシンボリック的要素を利用しようとした典型的事例としてとらえられるのである。だからこそ昭和4年3月、昭和に入ってからチーム成績が次第に不振となり、「新聞宣伝のためにチームを持つことも一考を要する状態に至った」(毎日新聞社史編纂委員会<sup>27</sup>)とき、上記の意味で「功成り名遂げて」(毎日新聞社史編纂委員会<sup>26</sup>)くれた大毎野球団は、深まる不況を背景としながら解散していくのである。

したがって、大毎野球団の場合、そこにみられる経済的イデオロギーは、まさに経済制度の目的に対する野球制度の手段化であり、この点については先の天勝野球団と同一の意味を有するイデオロギーのタイプとして位置づけられよう。しかし、選手資格について大阪毎日新聞社の意向を体した大毎野球団関係者は、選手が新聞社本来の職務遂行に励んでいることを喧伝することにより、チームおよび選手を完全なプロフェッショナル・チームおよび職業選手として見なされないよう、アマチュアとしての性格づけを巧妙に行おうとする意図をもっていたと考えられる。そしてその性格づけは、上記の木造の弁明に代表されるように極めて曖昧なベールに包まれており、秘密主義的で、今日の高度化されたアマチュア・スポーツ全体の持つ制度的性格(プロ化現象)と相通じるところがあると思われる。その意味では、この当時の典型的な野球制度に対する経済的イデオロギーの中にすでにそのようなタイプのイデオロギーが類型化

されることに、より一層注目すべき必要があらうと思われる。

#### 4) スポーツ雑誌に見られるプロフェッショナル・イデオロギーの萌芽

その他、比較的イデオロギー的水準に近い言説として当時の代表的雑誌である『野球界』（明治44年創刊、主幹横井鶴城）と『運動界』（大正9年創刊、主幹太田四州）を中心に見てみよう。両雑誌とも早稲田系メンバーを中心とする雑誌であるだけに、その中心的主張は先に例証した日本運動協会チーム結成の信念や信条と酷似している。

『野球界』誌は、大正9年1月号で「職業野球団組織の方策及現今の球界に対する意見」<sup>52)</sup>と題する特集を組み、旧早慶選手を中心にアンケート調査を実施している。その結果、回答者13名中まったく職業野球団に関心を示さなかったのは旧一高選手長與又郎のみで、他は必要は認めると肯定しながらも時期尚早との意見を含めてすべて職業野球団に対しては好意的であり、中にはフランチャイズ制を唱える者（旧慶大選手・富樫與一）もいた。全般的には、資本の充実とプレーヤーの技術の向上が第一条件としてあげられ、そのためには株式会社組織の結成と球場の確保が急務であることが強調されている。また、主幹横井鶴城は、大正10年の日本運動協会の設立に対して「武士道的な運動の精神にこり固まれる職業選手に依って組織せられる職業団が生まれて、始めて、野球技は、名實がなった國民的ゲームと發達する事が出来る」（横井<sup>54)</sup>）と述べ、武士道的イデオロギーの延長線上にプロフェッショナルな精神を位置づけることによって、そのイデオロギー的性格の一端を明らかにした。

『運動界』誌は、大正10年10月号から日本運動協会の後身である宝塚協会が解散した翌月の昭和4年8月号まで通算250頁余にわたって協会チームの戦績と戦況を伝えており、この雑誌の協会チームに対する注目度の高さと好意的な姿勢を伺い知ることができる。主幹太田四州は、協会チーム解散に際して「運動協會の主た

る目的は理想的専門的野球選手を養成するにあった」（太田<sup>33)</sup>）のであり「更に他の言葉を以てすれば形は營利式の會社であったが、其の主義精神は武士道的な選手養成にあり、それに依る球界の鬱氣打開…（中略）…凡ては此の精神を心とし、此主義を根本として邁往した」（太田<sup>33)</sup>）との認識を示した。プロ野球とは、まずもって野球に専念し、あらゆる野球人の模範となるような精神＝武士道的精神を有する選手によって形成された理想的な野球の体現として位置づけられており、その信条は当時の野球関係者が考える野球制度内部の高邁な理念や理想を擁護する武士道的なプロフェッショナル・イデオロギーとしての性格を有していたと見ることができよう。

#### 4. まとめにかえて

これまで述べてきた大正期の野球における3チームの代表的なイデオロギーを先の図1に示した「分析の枠組み」から再度類型化してみると、日本運動協会チームはAタイプ、天勝野球団はBタイプ、大毎野球団はBタイプと同様のイデオロギーを有するがアマチュア資格に固執しようとするCタイプのイデオロギーとして分類することが可能である。確かに、Cタイプのイデオロギーを先に定義したプロフェッショナル・イデオロギーの5つの要件に照らし合わせて考察してみると、とりわけ2), 3), 4)に関する重要な意識形態の欠如が指摘され、イデオロギー自体としては決してプロ化をめざそうとはしていない。しかしながら、企業主導型の生計維持機能とそれを基盤とした特別な野球技術の育成およびそのための訓練は、その財政的基盤を背景としつつBタイプのイデオロギーに転化される傾向をもつものと考えられる。また、そのような傾向は1993年に設立予定のプロ・サッカーの成立状況においてもみられ、その意味ではCタイプのイデオロギーをあえてプロフェッショナル・イデオロギーの一変形として類型化することにより、今日のプロ化にみられる前記2), 3), 4)の要件に関わるプロフェッ

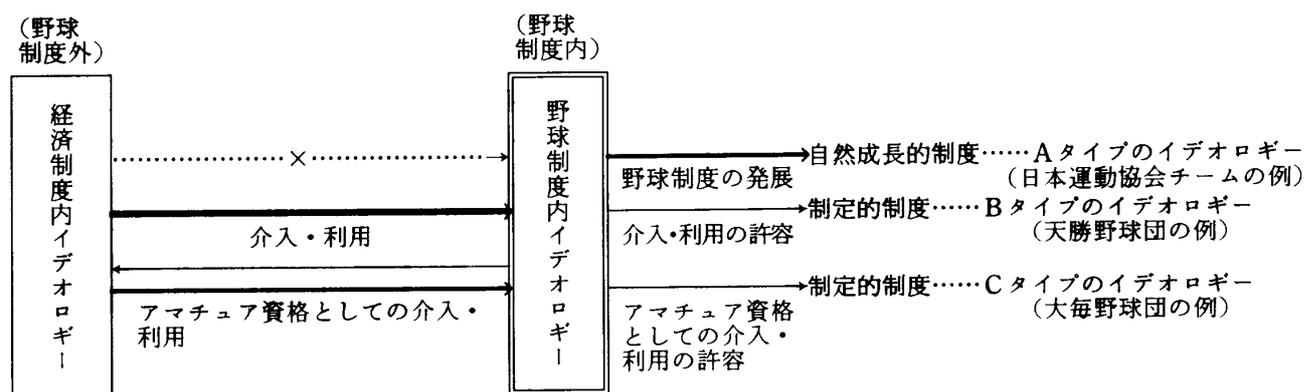


図3. 萌芽期における野球のプロフェッショナル・イデオロギー生成のタイプ (大正期)<sup>注7)</sup>

ショナル・イデオロギーの欠如が歴史社会的に浮き彫りにできる可能性があるものと考えられる。

したがって、図3に示されるように、(1) Aタイプのイデオロギーとしての日本運動協会チームの例は、野球制度以外の経済制度における組織（企業）の介入を許さず、あくまで制度内部の野球の健全な発展という理想を実現するためにプロ化を推進しようとする自然成長的な制度内改革派、(2) Bタイプのイデオロギーとしての天勝野球団の例は、野球制度外の経済制度における経済的イデオロギーの介入を許容し、その手段化を容認し、利用されることによってプロ化を推進しようとする企業主導型の制定的な制度外改革派、(3) Cタイプのイデオロギーとしての大毎野球団の例は、Bタイプと同様なイデオロギーを有するが、その資格においてアマチュアに固執しようとする企業主導型の制定的な制度外保守派、として大正期の野球における各々のプロフェッショナル・イデオロギーの萌芽を類型化することができると考えられる。また、当時の雑誌の論調の一端を垣間見ると、Aタイプのイデオロギーが、武士道的なイデオロギー的性格を有しながら早稲田大学出身者を中心とする身分的基盤を中心に展開され、ある程度のまとまりをもった意識形態としてその存在を認めることができるように思われる。

ところで、その後の1936(昭和11)年日本職業野球連盟結成によって、戦前におけるプロ野

球組織は制度的な成立をみるわけであるが、その中心的野球関係者であった早稲田大学出身の市岡忠男、浅沼誉夫、慶応大学出身の三宅大輔らのイデオロギー的状况は、歴史的推移の中でAタイプのイデオロギーを基盤としつつその限界を補完する形で読売新聞社によるBタイプのイデオロギーの可能性を受容する独自のプロフェッショナル・イデオロギーを形成していることが理解できる<sup>44)</sup>。また、Cタイプのイデオロギーは、今日なおわが国の高度化されたアマチュア・スポーツを支えるセミ・プロフェッショナルリズムとして、その選手雇用と経済的収支の曖昧性および選手の待遇に関わる対外的な秘密主義的、偽装的性格を保持しつつ、ますます巧妙に一般化されているように思われる。

しかし、大正期の野球に芽生えた3つの典型的なプロフェッショナル・イデオロギーの萌芽の影響については、なお様々な角度からの詳細な歴史社会的な検討が必要であり、戦前のプロ野球制度成立に果たした意義や役割、あるいはアマチュア野球界への影響、さらには他のスポーツへのイデオロギーの影響など多くの課題を残していることは論をまたない。が、スポーツ制度の諸局面、とりわけそのシンボル局面やテクノロジー局面の経済制度に果たす効果、影響がさらに増大している今日的情況を考えると、大正期に日本運動協会が示したスポーツ制度内部の利益とその理念を堅持したプロフェッショナル・イデオロギーの内実、およびその社会的機能にさらに注目することは極めて重要な

このように思われる。なぜなら、経済制度との平等な位置関係を保ちながらスポーツ制度の自律的な自然成長的發展を期するためには、もはや従来のアマチュア・イデオロギーに内包された倫理性、理念性の自律的な展開と共通するプロフェッショナル・イデオロギーの自律的な自己展開の可能性とその内容が議論される必要があると思われるからである。

(付記：本研究は日本体育学会第41回大会において「スポーツにおけるプロフェッショナル・イデオロギーの萌芽に関する歴史社会学的研究—大正期の野球をめぐって—」と題して発表した内容に加筆したものである。)

### 注

注1) 確かに概念的には、スポーツを制度ととらえる立場から Loy<sup>25)</sup>の「Play-Work 連続体の線上における Sport」の指摘やアマ・プロに統一した原理を主張する山本<sup>53)</sup>、「スポーツ労働」をキー概念としてその対立を止揚しようとする森川<sup>28)</sup>、さらには Stone<sup>42)</sup>による display としての sport の内的変質の問題、Rigauer<sup>35)</sup>の人間疎外的労働としてのプロ・スポーツの問題等々、多様な見解が示されてきている。しかし、プロ・スポーツの成立を含めてスポーツの制度的発展過程を社会学的視点から分析し、実証した研究は、これまでのところダニング・シェアド (Dunning and Sheard)<sup>5)</sup>のラグビーを対象とした研究しか散見できない状況にある。

注2) わが国のプロ野球の歴史を取り扱った文献は、小説、物語、随筆を含めて夥しい数に上るが、比較的客観的事実を記そうとする馬立<sup>49)</sup>、鈴木<sup>45)</sup>、鈴木<sup>46)</sup>らの記述においても、読売新聞社主であった正力松太郎を「日本プロ野球の偉大なる生みの親」として暗黙裡に了解し、彼個人の詳細な行動や考え方を好意的に描こうとし、さらにそのカリスマ性を暗黙裡に強調しようとしている。

注3) 大塚久雄<sup>34)</sup>は、M. ウェーバーの社会科学方法論を特徴づけようとする試みの中で、歴史のダイナミックスがマルクス主義的な階級的利害状況と理念の相関、さらには後者を人間の身分的状况に通じる理念的世界像とみて、それと前者との相関関係から描かれるとする。ここでの「制度的

—心理的利害状況」とは、このような大塚のウェーバー解釈に従い、階級概念を中心とする外的—経済的な利害状況に対応する概念として、何よりもまず制度を支える人々の身分的状况に規定された内的—心理的な利害状況に関連する用語として用いた。したがって、ここでの議論の焦点は、プロ野球制度成立に向けた何らかの身分的状况に規定された理念の総体とその社会的機能に向けられることになる。

注4) 佐伯<sup>37)</sup>は、厳密な意味におけるイデオロギーとは全世界の解釈に関する体系性をもった「世界観」と呼ばれる総体的イデオロギーとしているが、これに対し、芸術や学問など人間的営みとしての固有性をもつ世界についても、その体系性においては未成熟であるが社会的利害を反映するある程度まとまった意識形態が存在するという意味においてイデオロギーとしてとらえられるとしている。しかし、スポーツに関するイデオロギー的認識はまだ未成熟な状態にあり、その要因は単なるスポーツ研究内部の問題というよりは、近代文化論におけるイデオロギー的認識それ自体の本質の問題であるとの見解を示している。バリオン (Barion)<sup>2)</sup>もイデオロギー概念の歴史社会的規定性を辿りながら、その特徴としてそれ自体の意味が極めて流動的な性質をもつ概念であることを指摘している。

注5) 多々納<sup>48)</sup>は従来のスポーツの概念規定にみられる本質主義的、評価的要素を廃し、その概念の実体化を厳しく批判する。その定義は、あくまで認識段階に応じた我々の認識目的や観点との関係から相対的に決定されるものであり、その主張は真偽の問題ではなく、目的論的正当性の問題であるとする。

注6) ガース・ミルズ (Gerth & Mills)<sup>8)</sup>は、制度内的秩序を地位、シンボル、テクノロジー、教育の4つの局面から構成することにより、各制度間にみられる共通の諸構成要素を析出し、社会制度と人間の全体像を描きながらその構造的問題性を指摘しようとする。シンボル局面については「[シンボル]は視て感じとられるか、聴いて感じとられるであろう。つまり、それは、記号、信号、表象、儀礼、言語、音楽、その他の芸術といったものであろう。このようなシンボルがなければ、われわれは人間の行為者の行為を理解できないだろうし、また、通常は、行為者がこうしたシン

- ボルを信用し、使用することから、制度的秩序の支持や正当性がもたらされるのである。」(ガス・ミルズ<sup>9)</sup>p. 46) という定義がなされている。
- 注7) 野球制度と経済制度の制度的局面としてイデオロギーを位置づけた場合、Aタイプの野球制度内部のプロフェッショナル・イデオロギーの生成は、野球関係者の総体的な社会的利害を反映しつつ、その制度内部のイデオロギーをあくまで擁護し、経済制度内部の経済的イデオロギーの介入や文化的ヘゲモニーを許容しない自律的なイデオロギーとして規定することができる。他方、Bタイプのプロフェッショナル・イデオロギーの生成は、経済制度内部の経済的イデオロギーを優先させ、その介入や利用を通じた文化的ヘゲモニーを許容する他律的なイデオロギーとして規定することが可能である。
- 注8) 「合資会社日本運動協会定款」第二章 社員及出資の項によれば、「第五條 當会社の資本金総額は金八萬五千圓也とし、各社員の氏名及出資額並に其種類及び責任程度を定むること左の如し」として針重敬喜、飛田忠順、三島彌彦ら計32名の発起人の名前が列挙されている(日本運動協会発起人一同<sup>32)</sup>p. 127-131)。
- 注9) この節での大毎野球団の歴史的記述は、木造<sup>21)</sup>、毎日新聞社史編纂委員会<sup>26,27)</sup>等の資料を主に参照した。
- 注10) 木造が示した大毎野球団員の職務は、「日下輝 運動記事及事務、小野三千磨 同、腰本 壽支那課、森 秀雄 政治部編輯、高須一雄 外國通信部、内海 寛 西部毎日原稿整理、内海深三郎 校正見習、菅井榮治 西部毎日原稿整理、川越朝太郎 同、井川完事業部」(木造<sup>19)</sup>p. 63) となっているが、さらに詳細な業務内容や時間帯、仕事の密度と野球の練習との関係については示されていない。

### 文献 (References)

- 1) 東田一朔 (1989) プロ野球誕生前夜一球史の空白を埋める一。東海大学出版会：東京。
- 2) バリオン：徳永 恂 訳 (1974) イデオロギーとは何か。講談社：東京。〈Barion, J. (1971) Was ist ideologie? Bouvier Verlag Herbert Grundmann: Bonn.〉
- 3) Brundage, A. (1956) Reply to W. Meisl's article. Bulletin du Comite' International Olympique 58: 7.
- 4) 大毎野球団 (1926) 野球の米国。大阪毎日新聞社・東京日日新聞社：大阪、「まえがき」(頁なし)。
- 5) ダニング・シェアド：大西鉄之祐・大沼賢二 訳 (1983) ラグビーとイギリス人—ラグビーフットボール発達の社会学的研究一。ベースボールマガジン社：東京。〈Dunning, E. and Sheard, K. (1979) Barbarians, gentlemen and players, Martin Robertson: Oxford.〉
- 6) Feibleman, J.K. (1960) The Institutions of society. Gerge Allen & Unwin LTD: New York.
- 7) 深江 碧 (1929) 關西球界の二大明星の近状。野球界 19(5): 59.
- 8) ガス・ミルズ：古城利明・杉森創吉 訳 (1970) 性格と社会構造。日高六郎ほか編 現代社会学体系第15巻。青木書店：東京, pp. 3-51. 〈Gerth, H. and Mills, W. (1953) Character and social structure. Hercourt Brace & World Inc.: Orlando.〉
- 9) 日高哲朗 (1983) プロ野球の成立前史その1。千葉体育学研究 6: 14-19.
- 10) 原山芳三郎 (日本運動協会チーム初代メンバー、内野手)、遺稿(タイトルなし)、未公刊、計328枚[執筆時期は不明だが、本人の筆跡であることは1985年2月、未亡人児島久子氏より確認]
- 11) 橋戸頑鉄 (1921) 職業野球團設立の主旨。野球界 11(12): 63.
- 12) 鶴 芳生 (1922) 劇界の代表チーム天勝野球団。野球界 12(4): 115-117.
- 13) 菊 幸一 (1984) 近代のプロ・スポーツの成立に関する歴史社会学的考察—わが国における戦前のプロ野球の成立を中心に—。体育・スポーツ社会学研究編 体育・スポーツ社会学研究第3巻。道和尚書院：東京, pp. 1-26.
- 14) 菊 幸一 (1988) 近代日本におけるプロフェッショナル・スポーツの成立形態とその社会的条件に関する研究。昭和62年度教育学博士論文(筑波大学博乙第456号)。未公刊。
- 15) 菊 幸一 (1989) スポーツのプロフェッショナルリズム生成に関する歴史社会学的研究序説—戦前におけるプロ野球信条の形成を中心として—。体育・スポーツ社会学研究会編 体育・スポーツ社会学研究第8巻。道和尚書院：東京, pp. 94-95.
- 16) 菊 幸一 (1990) 日本のプロ・スポーツ。菅原 禮編著 スポーツ社会学への招待。不昧堂出版：東京, pp. 227-259.
- 17) Kiku, K. (1990) Introduction to comparative sociological study on types of development of professional sports in Japan and in Great Britain (2): Providing framing for analysis and application to Japanese case. 健康科学 12: 63-72.
- 18) 菊 幸一 (1990) プロ・スポーツの概念構成に関する一考察—近代におけるプロ・スポーツ成立史への

- 制度的視点一。奈良女子大学文学部・研究年報 34: 123-125.
- 19) 木造龍蔵(1923)極東大會を機會に大毎野球團の立場を明かす。野球界 13(9): 63-64.
- 20) 木造龍蔵(1927)大毎野球團の歴史と組織。野球界 17(3): 40.
- 21) 木造龍蔵(1929)大毎野球團を哭す。野球界 19(9): 22-26.
- 22) 河野安通志(1921)選手の詮衡は嚴重にする。野球界 11(12): 48.
- 23) 河野安通志(1922)職業選手の日常。野球界 12(3): 16-18.
- 24) 古園井昌喜・菊 幸一(1990)戦前の北九州地方における企業スポーツの研究—中島鉱業, 八幡製鉄所野球部をめぐる。九州体育学会第39回大会号, p. 54.
- 25) Loy, J.W. (1978) Sport as a social phenomenon. In: Loy, J.W., McPherson, B.D. and Kenyon, G. (Eds.) Sport and social system. Addison-Wesley: California. pp. 3-26.
- 26) 毎日新聞社史編纂委員会編・発行(1932)大阪毎日新聞五十年。大阪, p. 415.
- 27) 毎日新聞社史編纂委員会編・発行(1952)毎日新聞七十年。東京, p. 533.
- 28) 森川貞夫(1977)スポーツアマチュアリズム研究の基本問題—「スポーツ労働」論序説一。影山 健ほか編 シリーズ・スポーツを考える第2巻, 国民スポーツ文化。大修館書店: 東京, pp. 379-424.
- 29) 中井 繁氏宅(日黒区八雲1-6-7)で1986年8月10日インタビュー。
- 30) 中野秀一郎(1981)プロフェッションの社会学, 木鐸社: 東京, p. 60.
- 31) 日本体育協会編・発行(1986)日本体育協会スポーツ憲章。
- 32) 日本運動協会発起人一同(1921)日本運動協會創立の趣意。運動界 2(4): 120-137.
- 33) 太田四州(1924)運動協會解散決議。運動界 5(3): 2.
- 34) 大塚久雄(1966)社会科学の方法。岩波書店: 東京, pp. 2-95.
- 35) Rigauer, B. (1969) Sport und arbeit. Suhrkamp Verlag: Frankfurt.
- 36) 佐伯聰夫(1975)体育と文化。菅原 禮編著 体育社会学入門。大修館書店: 東京, pp. 26-69.
- 37) 佐伯聰夫(1990)スポーツ・イデオロギー。菅原 禮編著 スポーツ社会学への招待, 不昧堂出版: 東京, pp. 260-290.
- 38) 佐藤光房(1986)もうひとつのプロ野球。朝日新聞社: 東京。
- 39) 瀬沼克彰(1982)企業の文化戦略。学文社: 東京, p. 22.
- 40) 菅井栄治氏宅(元大毎野球団外野手, 宝塚市湯本町2-4)にて1986年2月5日インタビュー。
- 41) サムナー: 青柳清孝ほか訳(1975)フォークウェイズ。日高六郎ほか編 現代社会学体系第3巻。青木書店: 東京。〈Sumner, G. (1907) Folkways, Ginn & Co.: Boston.〉
- 42) Stone, P. (1971) American sports: Play and display. In: Dunning, E. (Ed) The sociology of sport: A selection of readings. Frank Cass: London. pp. 47-65.
- 43) 鈴木関太郎(1923)斯界に雄飛せんとする天勝野球団。野球界 13(6): 22-23.
- 44) 鈴木惣太郎(1958)プロ野球今だから話そう。ベースボールマガジン社: 東京, pp. 18-24.
- 45) 鈴木惣太郎(1976)日本プロ野球外史。ベースボールマガジン社: 東京。
- 46) 鈴木龍二(1984)プロ野球と共に五十年(上)。恒文社: 東京。
- 47) 社団法人企業メセナ協議会編・発行(1991)メセナ白書'90。
- 48) 多々納秀雄(1975)スポーツの概念規定についての若干の論理的・方法的考察。九州大学体育学研究 5(3): 1-14.
- 49) 馬立龍雄編(1961)プロ野球二十五年。報知新聞社: 東京。
- 50) 運動界編集部(1923)運動界消息・協會軍天勝を破る。運動界 4(10): 84-85.
- 51) 運動界編集部・青 峰生(1924)幸ある移植—宝塚に行く協會チームを送る。運動界 5(3): 103-106.
- 52) 野球界編集部(1920)職業野球團組織の方策及現今の球界に對する意見。野球界 10(1): 68-70.
- 53) 山本正雄(1975)スポーツの社会・経済的基礎。道徳書院: 東京。
- 54) 横井鶴城(1921)職業野球團問題。野球界 11(6): 2.

(平成2年12月25日受付)